

“Being” が進路につながる？

2025・1・15 重枝 一郎

私は、昔から「ビーイング」という言葉を使っている。この言葉については、校長研修だより22・134などに書いている。この言葉の出会いは、「ビーイング」と題したグループワークTRを行ったことがきっかけになる。このワークについては、シリーズで書いた「授業風景」を読めばイメージできると思う。自分の、自分たちの在り方を、相手意識を高めながらつくるワークである。

「ビーイング」とは、「自分の生き方・あり方」のことになるが、生徒は多感なこの時期に、他者と関りながら、「自分はどうか？」と自問自答を繰り返す。そして、自己存在感を高めていく。これが「大切なひとり」につながる。「他者と関りながら」の「他者」には、私たち教師もいる。私たち教師自身の「ビーイング」は生徒に大きく影響する。

さて、「ビーイング」は、「自分の生き方・あり方」なのでキャリア教育といえる。本校での「はないち」の時間は、具体的な価値を掘む時間になる。生徒は、探究のテーマを設定する際、「好きなこと（興味・関心）」「得意なこと（能力）」「大切なこと（価値観）」「社会から求められていること（社会）」が重なる部分にテーマを見出そうとする。その中で、「自分はどうか？」「どう生きたいか」ということを考える。その近未来に大学進学等がある。大学で何を学びたいか、将来どんな仕事をしたいかという視点をもつ。

普通、進学先や受験から逆算してテーマを選ぶ指導はしない。探究に取り組んだ結果、それが進路や受験につながれば、それはそれでいいし、つながらなくてもいい。そもそも探究は、分野横断的なものなので、何かしらの関連性がある。

私の考えは、もっとざっくりしていて、テーマが学問分野につながればいいとは考えるが、主に考えることは、探究を通して、新たな出会いや、つながりが生まれればいいと思っている。この機会は、意外と将来につながっている。

探究に積極的に取り組んでいる学校とそうでない学校との比較調査を読むと、前者の方が圧倒的に主体性やチャレンジ意欲が高まったというデータがある。受け身ではなく主体的になるとすべての取組が変化する。この部分は、最上位の目標の「自律的学習者」につながる。ところが、教師や親の心配性が、その足をひっぱることがある。進学校の行事の取組がすごいのは、主体性があることが、すべてに作用していくからである。本校もそうあるべき学校だと考える。今の生徒は、年内に進路を決める生徒が増えている。それを不安に思う私たちなのだが、生徒の中には、「合格が決まったからこそ、残された高校生活で自分がやりたいことに打ち込む」と思っている生徒もいる。これも主体性と考えてよい。

その調査には、教師に対してのものもある。「探究学習が、教師の指導力向上や授業改善に役立つか？」という質問は、ずっと経年変化を見るために必ずある。8年前は3割くらいだったそうだが、昨年は9割以上が「とても思う」「そう思う」になっている。多くの教師が、教材開発のヒントを得たり、指導方法においても気づきを得たりすることが多いということである。今、多くの教師のあるあるで、「探究でもやったよね」と、普段の教科の授業で話す。

私たち教師は、いろいろなことに迷いながら、行ったり来たりしながら、ぐるぐる回ったりしながら、実は前に進んでいる。迷子になって、最短距離でない道を進むと、いろいろな景色と出会う。生徒の探究も私たちの仕事も本質はそれだと思う。